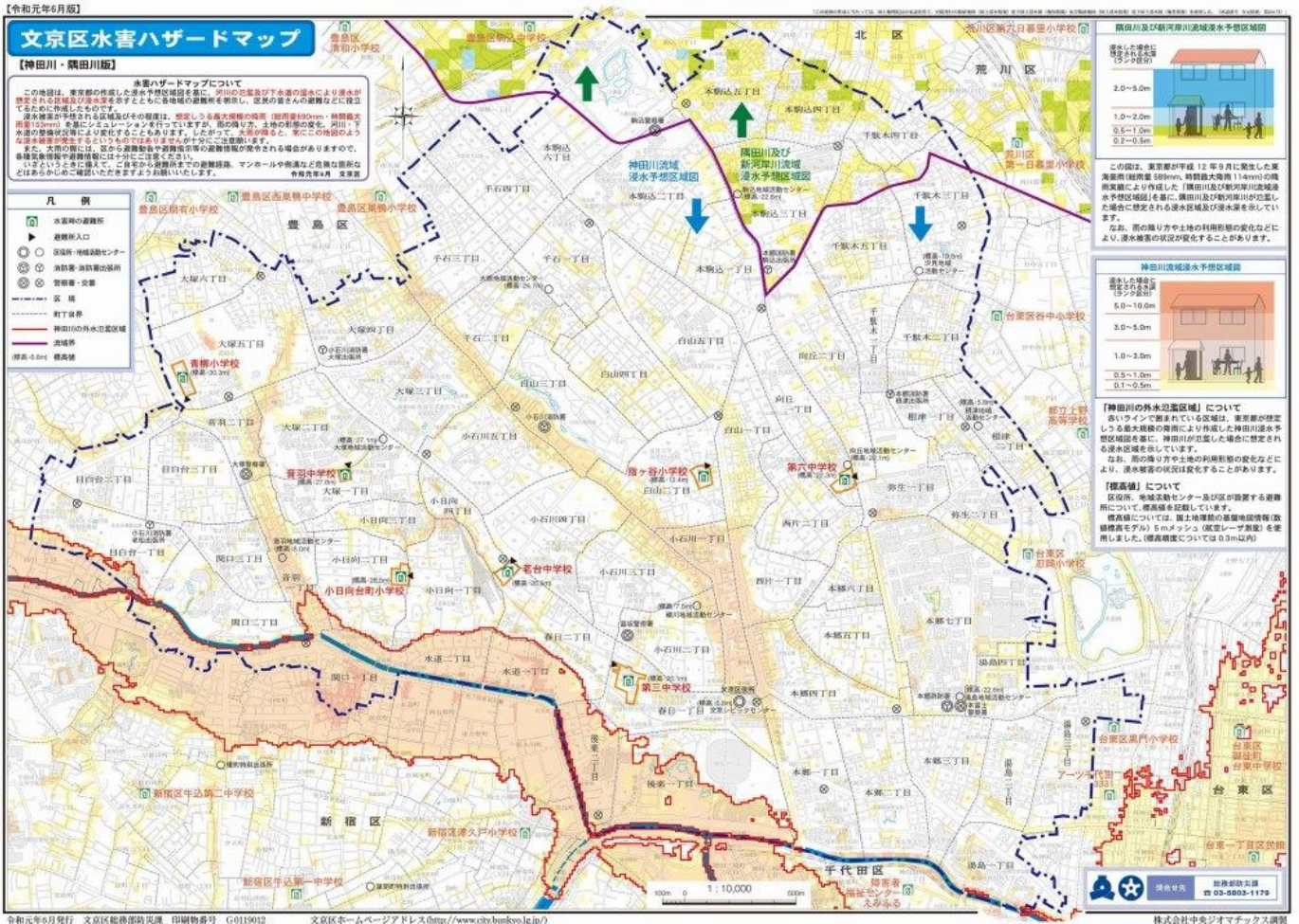


文京区の公表している防災関係の地図は3種類ある。避難場所の地図、土砂災害ハザードマップ、水害ハザードマップである。このうち土砂災害のものは、神田川北側の段丘崖などごく限られた地域のみで、ほとんどの文京区民には関係がない。しかし水害ハザードマップは、すべての文京区民が知っておく必要がある。



まず知っておかなければいけないのは、文京区は「神田川」と「荒川・新河岸川」の両方の流域(集水域)にまたがっているという事実である。文京区の北端は「荒川・新河岸川」の流域にかかっている、もしそれらが氾濫を起こすと、文京区も浸水の恐れがあるということだ。地図の紫色実線よりも北側の区域だ。具体的には本駒込や千駄木の一部分が該当する。凡例によれば、荒川やそれに接続する形の新河岸川が氾濫した場合、文京区でも一部1m程度の浸水が発生する可能性があることを示している。

しかし、文京区の水害で最も脅威なのは、南を流れる神田川だ。神田川は文京区南部の武蔵野台地(目白舌状台地)の段丘崖の下を流れ、新宿区や千代田区との境界を成している。水害ハザードマップでは、その神田川を挟んで、南北数百メートルに渡って、3メートル以上の浸水域が示されている。江戸川橋周辺の「関口1丁目」付近が区内で最も水害の危険が大きく、5メートル以上の浸水の危険があることもわかる。神田川は暗渠の地下放水路(大雨の時に一時的に雨水をためる設備)がある。水道橋駅の近くで、その入口を見ることができる。しかし規定量を超える流入水があった場合は、間違いなく氾濫を起こし、床上浸水を起こす可能性があるのだ。

それ以外にも、旧音羽川流域(江戸川橋~護国寺間)、小石川1丁目~千石3丁目、それに茗荷谷周辺にも細長く浸水の可能性がある地域がある。これらはすべて、武蔵野台地の東縁を細い河川(神田川の支流)が削った小規模な「浸食谷」である。こうした地形は、建物が多い現在では実感しにくい。こうした水害ハザードマップや地形図をよく見て、水害が起きる前に自分の住んでいる場所の危険性について知っておくことが大切だ。